



学校司書だより



毎月23日は
「さんだ子ども読書の日」

夏休みこんな本がおすすめ（5・6年生）

いよいよ夏休みが始まります。小刻みにしか取れなかった読書の時間がとりやすい絶好の機会です。さあ、どんな本を読もうか。迷っている人に学校司書からのおすすめ本を紹介します。これらを参考に、幅広く充実した読書生活を送ってくださいね。

読み終えたら「読書通帳」に記録しましょう。



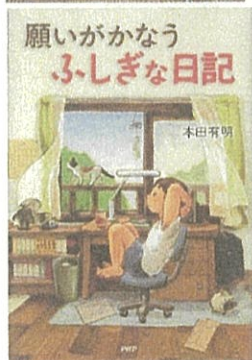
「落語少年 サダキチ（よん）」 田中啓文:作 福音館

5年生の忠志（サダキチ）は、落語が大好きな少年。忠志は、しんせきの住む田舎のお寺で肝だめしの前の怪談ばなしをすることに。ところが、忠志はおぼけが大の苦手。落語の後の肝だめしが気になって、落語の練習にも身が入らない。そんな忠志の落語はみんなを喜ばせることができるでしょうか。



「坂の上の図書館」 池田ゆみる:作 さ・え・ら書房

春菜が暮らすことになったのは、自立支援センター「あけぼの荘」。それは市民図書館のとなりにある。何事にも消極的になっていた春菜に最初に声をかけてくれたのが真琴。いつも活発な真琴や図書館の司書、そして本との出会いが、引っ込み思案の春菜を変えていく。



「願いがかなうふしぎな日記」 本田有明:作 PHP出版

おばあちゃんからもらった日記に願い事を書くと、その願いが不思議と叶っていく。

主人公の光平は水泳が苦手。今年こそ泳げるようになりたい！と日記に書く。はたして光平は泳げるようになるのか？

日記を通じて大切なことを学び、成長していく少年の姿を描いた夏の物語。



「わきだせ！いのちの水」 たけたに ちほみ:作 フレーベル館

きれいな水が出る井戸を掘ることで、たくさんの命を救うことができる。日本の「上総掘り井戸」を応用し、発展途上国に井戸を掘る技術を伝える、大野さん。彼の理念は「飢えている人に魚を与えるのではなく、魚の取り方を教えよ」である。

アフリカでの実際の活動記録を記したノンフィクション本。

おとなになれなかった
弟たちに……



「おとなになれなかった弟たち……」 米倉齊加年:作 偕成社
太平洋戦争中の食べるものもない時代。おなかのすいた4年生のぼくは、いけないと知りながらも、生まれたばかりの大好きな弟に配給されたミルクを、何度もぬすみ飲みしてしまい、弟は栄養失調で……。作者の体験をもとにつづられた悲しい物語です。戦争で亡くなるのは爆弾だけではないということも知ってください。



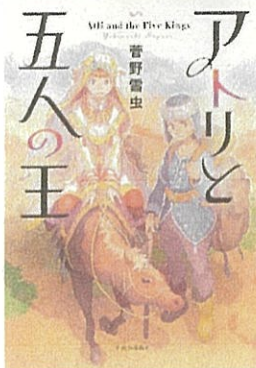
「クニマスは生きていた！」 池田まき子:作 汐文社
日本一深い湖、秋田県田沢湖。ここでしか生息していないというクニマスが、1936年のダム建設で玉川の毒水が流れ込み絶滅してしまったそのクニマスが、2010年500kmも離れた山梨県西湖で発見される。クニマスが西湖で生きていた経緯と、自然の大切さ・尊さを考えさせる感動のドキュメンタリーです。



「虹色図書館のへびおとこ」

櫻井とりお:作 河出新書房

いじめがきっかけで学校に行けなくなった、小学6年生の火村ほのかたどり着いたおんぼろ図書館でみどり色の司書、謎の少年、そして、たくさんの本に出会い、ほのかの世界は少しずつ動き出す。図書館があなたのところを彩る感動の物語。



「アトリと五人の王」

菅野 雪虫:作 中央公論新社

祖国でしいたげられて育った姫・アトリ。嫁ぎ先の小国で受けた王の教えを武器に、やがて彼女は人々の希望となる…。これは、生涯で5回も結婚することになった姫君の物語。



「火狩りの王<1>春の火」

日向理恵子:作 ほるぷ出版

黒木森を、火狩りが駆ける。人類最終戦争後の世界。大地は黒い森におおわれ、人々は人体発火病原体におかされ発火する身体を持つ。火狩りは炎魔と闘い、人が唯一安全に扱える<火>を手にするために三日月の鎌をふるう。11歳の灯子と15歳の煌四、彼らの運命が交差する。